

地形的観点からみた国府の立地に関する基礎的研究

石倉 捷¹・二井 昭佳²

¹ 学生会員 国土館大学大学院工学研究科 建設工学専攻 (〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1)

E-mail: s4me201x@kokushikan.ac.jp

² 正会員 国土館大学理工学部 准教授 (〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1)

E-mail: nii@kokushikan.ac.jp

本稿は、発掘調査で国庁位置が判明している12の国府を対象に、国府に関わるデータを整理した上で、分類した地形タイプごとに立地地形の特徴を考察した。その結果、①台地タイプでは平地部から視認でき昇り降りに支障の少ない高さで、国庁正面側に高低差があり、かつ地形により450～500m程度の大きさの領域を設定できる台地、また②平地タイプでは山に囲まれた比較的小規模の平野が国庁正面に向かい上り勾配になる地形、加えて③両者ともに駅路を中心に周辺への見通しに優れた場所が選ばれる傾向にあることを指摘した。このことから国府の立地選定における地形の意味として、防御・警戒・視線による支配が重要な観点であることを示唆した。

キーワード：国府、国庁、立地地形、地形の意味

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

国府は、奈良時代から平安時代にかけて、全国の旧国ごとに造られた都市であり、日本における初期段階の都市のひとつの形である。これは、それまでの地方豪族による支配体制をあらため、律令制に基づく中央集権的な国家体制を築くためのものであり、その制度は遅くとも701年の大宝律令により完成したとされる。この律令国を治めるのは中央から派遣された国司であるが、彼らが、その地方の有力豪族との関係も含め、どのように地形を利用して国府造営を考えたのか興味深い。

これまで国府に関する研究は、歴史地理学を中心に進められてきた。そこでの大きな関心は国府の所在地を明らかにすることに向けられており、風土記などの文献資料や字名などの地名、国分寺や総社といった国府に関連する施設、条里地割や駅路などの資料を用いて国府位置を推定するものとなっている。それらの知見をもとに発掘調査も進められ、国府関連施設が明らかになったものも出てきているが、全体からみれば未だ推定の域を出ない国府が多いのが現状である。

こうしたなかで全国的な国府の立地特性に関する研究として、歴史地理学者である藤岡は、国府の推定作業を進めるなかで、国府が交通の利便性の高い場所に立地し

ていることを指摘している¹⁾。また、佐藤、十代田ら²⁾は、国府の立地特性とその背後にある地域経営思想を明らかにしようとする研究において、全国の国府を対象に地理的、地形的な観点からその立地地形を定量的に類型化し、その立地特性を明らかにすることを試みている。これらの研究は、国府立地に関する重要な着眼点を提示しており、参考に資する点が多い。ただ、発掘により確定されている国府と推定に留まる国府が同列に扱われていることに疑問が残る。また本論が目指す国府造営における地形の活用方法にアプローチするには、できるだけ小縮尺の地形図を用い、地形により生み出される空間の特徴を捉える分析が必要だと考える。

そこで本研究では、発掘調査により国庁の位置が確定している国府を対象に、①対象国府の基礎データと立地地形の分類をおこなったうえで、②地形的観点から国府の立地の特徴を明らかにし、国府における地形の意味について考察することを目的とする。

(2) 研究の対象と方法

国府の所在地が記載されているものとして、「和名類聚抄」がある。これは平安中期に作られた日本最古の辞書であり、また「色葉字類抄」にも国府の所在が記載されている。これらによると全国に68ヶ所の国府が存在したとされている。しかし、その具体的な位置については

未だに推測の域を出ないものも多い。そこで本研究では、発掘調査によって国庁の位置が判明している12の国府を対象とした(表-1)。

研究の方法は、まず2章で各国府の発掘調査報告書や、国府に関連する社寺がまとめられている「中世諸国一宮制の基礎的研究³⁾」などを用いて国府及びその関連施設に関する基礎データを整理した。なお本研究で用いた発掘調査報告書は表-2のとおりである。その後、地形図に国庁位置をプロットし、その立地地形を大きく二つに分類した。3章では、2章で分類した立地地形のうち台地タイプの国府を対象とし、台地の高さやその平面形状、国庁からの位置や国庁からの眺望に注目し、その特徴を把握した。4章では、もうひとつのタイプである平地タイプの国府を対象とし、地形による囲みや地形勾配、国庁からの眺望に注目し、その特徴を把握した。5章では3、4章の結果を踏まえ、地形的観点からみた国府の立地について考察した。

表-1 対象国府一覧

	国府名	所在地	造営時期	廃止時期
1	東海道	伊勢国府 三重県鈴鹿市広瀬町	8世紀後半	11世紀
2		三河国府 愛知県豊川市白鳥町	8世紀中頃	10世紀中頃
3		常陸国府 茨城県石岡市石岡	8世紀	11世紀
4	東山道	近江国府 滋賀県大津市大江	8世紀	10世紀末
5		美濃国府 岐阜県不破郡垂井町府中	8世紀前半	10世紀半ば
6		下野国府 栃木県栃木市田村町	8世紀前半	11世紀
7	山陰道	陸奥国府 宮城県多賀城市市川	724年	11世紀
8		因幡国府 鳥取県鳥取市国府町中郷	8世紀前半	11世紀
9		伯耆国府 鳥取県倉吉市国府	8世紀後半	10世紀
10	西海道	出雲国府 島根県松江市竹矢町・大草町・山代町	8世紀前半	10世紀
11		肥前国府 佐賀県佐賀市大和町大字久池井	8世紀前半	11世紀後半
12	日向国府 宮崎県西都市三宅国分	8世紀後半	10世紀前半	

表-2 対象国府の発掘調査報告書一覧

国府名	書籍名	発行者	発行年
伊勢国府	伊勢国府跡 15	鈴鹿市考古博物館	2013
三河国府	三河国府跡確認調査報告書	豊川市教育委員会	2003
	豊川市内遺跡発掘調査報告書概報区	豊川市教育委員会	2006
常陸国府	常陸国衙跡	石岡市教育委員会	2009
近江国府	近江国府発掘調査報告書	大津教育委員会	2011
美濃国府	美濃国府跡発掘調査報告書 3	垂井町教育委員会	2005
下野国府	下野国府跡Ⅲ	栃木県教育委員会	1981
	下野国府跡Ⅹ	栃木県教育委員会	1990
陸奥国府	多賀城跡	宮城県教育委員会	2010
因幡国府	因幡国府跡遺跡発掘調査報告書	国府町教育委員会	1987
	史跡因幡国府跡	国府町教育委員会	1986
伯耆国府	史跡伯耆国府跡国庁跡発掘調査報告書	倉吉市教育委員会	2012
出雲国府	史跡出雲国府跡発掘調査報告書	島根県教育委員会	1988
	史跡出雲国府跡	島根県教育委員会	2013
肥前国府	肥前国府跡	大和町教育委員会	2000
日向国府	日向国府跡	西都市教育委員会	2012
	日向国府跡	西都市教育委員会	2013

2. 対象国府の概要

(1) 国庁の大きさと向き

国庁は、国司が政務をおこなう施設であり、政庁とも呼ばれる。その空間構成には、以下の示す共通の特徴があると指摘されている⁴⁾。①方形に近い敷地の北寄り正面に正殿が配置され、場合によってはその前後に前殿あるいは後殿が置かれる。②正殿の東西には南北にのびる脇殿が対称形に配され、コの字に配置された建物の間は広場となる。③周囲は堀や溝によって区画され、門は南に配置される。

今回対象とした国府でも、すべての建物が発掘されているわけではないが、おおむね建物配置が確定されており、上述した空間構成になっている。そこで国庁の大きさとその向きについて発掘調査報告書をもとにまとめた(表-3)。なお発掘調査報告書に向きが記載されていないものは同書に掲載されている実測図より算出した。

表-3をみると、国庁の大きさはおおむね100m×80m程度であるものが多いことがわかる。当時は政治力・経済力・土地面積・人口などの国力により地方諸国を4等級に分類していたとされるが、国庁の大きさに関していえば、国の等級にあまり相関関係がみられなかった。

また、国庁の向きをみると、基本的に正殿が南面するように配置されているが、常陸国府と日向国府を除く10国府では傾きがみられた。とくに因幡国府や肥前国府では⁷⁾程度と大きいことから、この傾きはなんらかの意味を持つ可能性がある。

(2) 国府と関連施設との位置関係

国府に關係の深い施設として、一宮や総社、国分寺といった社寺また駅路や河川といった交通施設に注目した。

前者を選んだ理由として、国司の任務には、行政・司法・軍事に加え、国内の神社の管理や祭祀も含まれていたことが挙げられる。とくに一宮は国内で最も地位が高く、国司が任国内の諸社に巡礼する際の最初の神社であり、総社は国司が巡礼する負担を軽減するために、国内の神社の祭神を集めて国府の近くに設けたのが起源だとされている⁵⁾。また国分寺は714年の聖武天皇の詔により国家鎮護を目的として造営された国分僧寺と国分尼寺とからなる官寺であるが、国司がその造営工事の責任者だったとされている。そこで国府との位置関係を把握するために、国庁からの距離を計測した。

表-3に示すように一宮との距離は、常陸国府や下野国府のように40kmを超えるものもあれば、近江国府や因幡国府のように1km以内に存在しているものもあり、一定の傾向がとくに見られなかった。その一方で総社は、下

表-3 対象国府の基礎データ

国府名	等級	方位	大きさ (縦×横)	関連寺院					交通関係				立地地形 タイプ	
				一宮		総社		国分寺		駅路		河川		
				神社名	距離	神社名	距離	国分僧寺	国分尼寺	七道	距離	河川名		距離
伊勢国府	大国	N1° W	110m × 80m	椿大神社	9.8km	不詳	—	6.7 km	推定	東海道	0.6 km	安楽川	0.8km	台地
三河国府	上国	N0° 50' E	— × 70m	砥鹿神社	8.0km	総社	0.1 km	0.8 km	1.1 km		0.6 km	音羽川	1.3km	台地
常陸国府	大国	N0° E	99.4m × 98.5m	鹿島神宮	40.7km	常陸國總社宮	0.2 km	0.8 km	1.3 km		0.5 km	恋瀬川	1.1km	台地
近江国府	大国	N3° E	109m × 72m	建部神社	0.6km	不詳	—	0.8 km	不詳	東山道	0.2 km	瀬田川	1.2 km	台地
美濃国府	上国	N2° E	75m × 70m	南宮大社	1.9km	南宮御旅神社	0.1 km	2.6 km	1.6 km		0.6 km	相川	0.4 km	平地
下野国府	上国	N1° 40' E	90m × 90m	二荒山神社	45.6km	大神神社	2.9 km	2.0 km	2.6 km		0.3 km	思川	1.0 km	平地
陸奥国府	大国	N1° 04' E	116m × 103m	鹽竈神社	2.7km	陸奥總社宮	0.7 km	9.7 km	9.2 km	山陰道	0.1 km	砂押川	1.1 km	台地
因幡国府	上国	N8° E	110m × 60m	宇倍神社	0.7km	不詳	—	0.7 km	不詳		0.3 km	袋川	0.4 km	平地
伯耆国府	上国	N1° E	110m × 90m	倭文神社	12.5km	国庁裏神社	0.1 km	0.4 km	不詳		0.6 km	国府川	0.9 km	台地
出雲国府	上国	N1° E	100m × 70m	熊野大社	6.6km	六所神社	0.1 km	1.3 km	1.7 km	西海道	0.3 km	意宇川	0.2 km	平地
肥前国府	上国	N6° 50' W	104m × 83m	與止日女神社	1.2km	不詳	—	1.3 km	1.0 km		0.7 km	嘉瀬川	0.2 km	平地
日向国府	中国	N0° E	80m × 75m	都農神社	22.3km	都萬神社	0.4 km	1.4 km	0.8 km		—	一ツ瀬川	1.7 km	台地

野国府が2.9kmとやや離れているものの、その多くが国府に隣接するような位置に設けられており、上述した配置経緯によく叶う結果となった。なお総社が不詳である伊勢、近江、因幡、肥前の4つの国府に注目すると、伊勢国府を除けば国庁と一宮の距離が1km前後と近いという特徴がみられた。

国分僧寺、国分尼寺の位置関係をみてみると、陸奥国府と伊勢国府を除き、3km以内に存在する結果になった。また国庁と国分寺間よりも、国分僧寺と国分尼寺間の方が近いという特徴がみられた。

また交通関連施設として挙げた駅路は、都と地方を結ぶ道であり、特に重要な道は七道駅路と呼ばれ、山陽道、東海道、東山道、西海道、南海道、北陸道、山陰道からなるとされる⁶⁾。その成立時期は7世紀後半以降とされており、道幅は10m前後である。駅路の位置を把握するため、「地図でみる東日本・律令制下の陸海交通・条里・史跡⁷⁾」と「地図でみる西日本・律令制下の陸海交通・条里・史跡⁸⁾」

を参考に、国庁と七道道路の距離を算出した。また河川については一定以上の川幅を持つものを対象にし、入手できる最も古い地図を用いて国庁からの距離を算出した。

表-3をみると駅路との距離は全ての国府で1km以内という結果になった。また河川との距離は、すべての国府が2km以内にあり、かつその半数以上が1km以内という結果になった。藤岡が指摘するように国府は交通の利便性の高い場所に造られていることを確認できた。

(3) 国庁の地形タイプ

二万五千分の一地形図に国庁の位置をプロットしてみると、図-1の常陸国府のように台地に立地するものと、図-2の出雲国府のように平地に立地するものの2つのタイプがあることに気づく。そこで12の国府を台地タイプ(7事例)と平地タイプ(5事例)に分類し、次章以降で地形タイプごとに詳細な検討をおこなう。

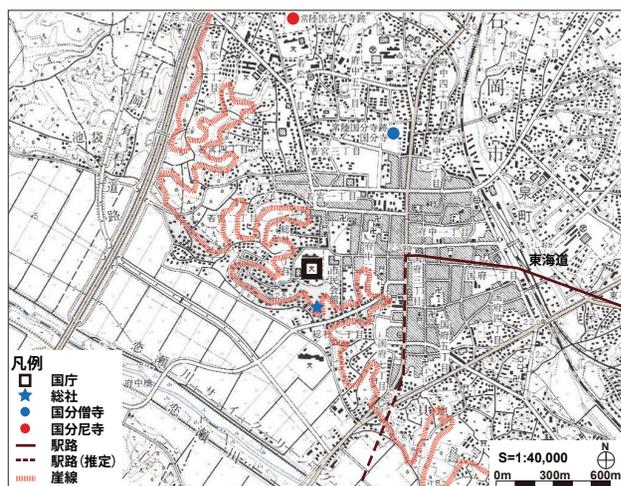


図-1 台地タイプ 常陸国府
(1/25000 地形図 (国土地理院) に筆者加筆)

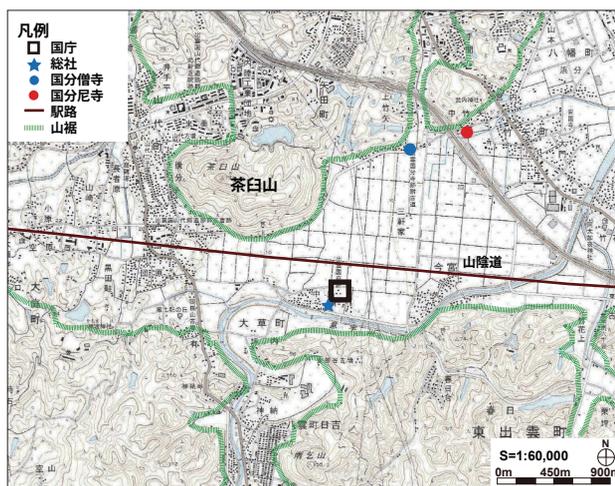


図-2 平地タイプ 出雲国府
(1/25000 地形図 (国土地理院) に筆者加筆)

3. 台地タイプにおける立地地形の特徴

(1) 分析の視点

台地タイプの立地地形の特徴を把握するために、該当する7事例について、①台地の高さ、②台地の平面形状とその大きさ、③台地における国庁の位置、④国庁からの眺望について注目して分析をおこなった。

(2) 台地タイプにおける地形の特徴

a) 台地の高さ

台地の高さを把握するために、地形勾配が急激に変化する部分の高低差を算出した。算出にあたっては、国土地理院が公開している基盤地図情報の5mメッシュ標高データを用い地形3D作成ソフト「カシミール3D⁹⁾」により断面図を作成し1m単位で高低差を算出した(表-4)。

表をみると、三河国府と日向国府は6mとやや低いものの、それ以外の5事例では10mから20mの高低差であり、そのうちの3事例が15m程度になっている。この高さは、3階から6階程度の建物高さに相当することから、平地部から視認できる高さで、平地部との昇り降りが著しく困難ではない高さの台地が選ばれている可能性がある。

b) 台地の平面形状と大きさ

台地タイプのなかには平面規模の小さい台地に立地するものもあれば、比較的大きな台地に立地するものも存在する。ただ図-3のように平面規模が大きいものであっても、良く見ると、台地に食い込んだ谷によって小さな

表-4 台地タイプにおける台地の高さとその形状

国府名	台地の高さ	台地形状
伊勢国	16 m	南側に凸
三河国	6 m	南側に凸
常陸国	14 m	南側に凸
近江国	10 m	南側に凸
陸奥国	19 m	南側に凸
伯耆国	15 m	東側に凸
日向国	6 m	南側に凸



図-3 台地タイプ 伊勢国府 (1/25000 地形図 (国土地理院) に筆者加筆)

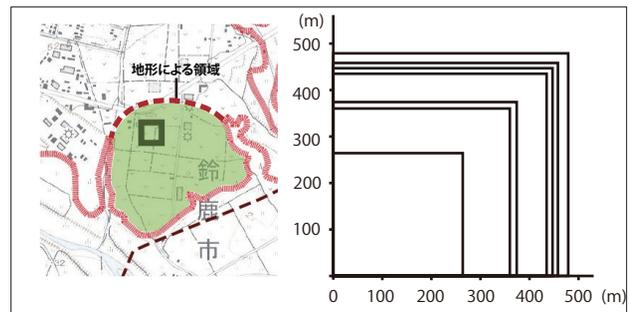


図-4 面積の算出方法と領域の大きさ (正方形面積換算)

台地に分割されている場所に、国庁が位置しているという特徴がみられる。そこで台地の大きさを把握するために、台地の崖線とそれらを結んだ線によって得られる面積を正方形換算しグラフ化したものが図-4である。これをみると、7事例のうち6事例が350m~500mであり、そのうちの4事例が450m~500mという結果になった。この大きさは、人の歩行速度が毎分80mであることを考えるとおおむね5分程度で歩ける範囲の領域に相当し、地形によってこうした大きさの領域が設定できる台地が選ばれている可能性がある。

c) 台地における国庁の位置

台地の形状を整理したのが表-4である。これをみると、7事例のうち6事例で南側に凸形状の台地になっており、すべての事例で南側に高低差を有している。これはおそらく国庁が南面することに関係していると考えられ、南側に段差がある台地が選ばれている可能性がある。

d) 国庁からの眺望

対象とした7事例において国庁からの眺望に注目してみると、図-3のように国庁の位置は周囲の平地部への見通しが開ける場所に立地している傾向がみられる。なかでも駅路に対する見通しが大切にされているように感じられた。今回は傾向を指摘するに留まるが、国庁からの眺望はその立地選定に大きく関係していると思われることから、今後、定量的な分析をおこなう。

(3) まとめ

以上の結果をまとめると、台地上に国庁を設けるにあたっては、①平地部から視認できかつ昇り降りに大きな支障のない高さ、②南側に高低差を有する台地のなかで、③周囲の地形により450~500m程度の領域を設定でき、かつ④駅路を中心とする周辺への見通しに優れた場所を選んでいたのでないかと考えられる。

こうした地形が選ばれていた理由として、高さや地形による領域により防御を確保しつつ、周囲への見通しにより緊急時への警戒と平地部に対する視線による支配という意図があったのではないかと考えられる。

4. 平地タイプにおける立地地形の特徴

(1) 分析の視点

平地タイプの特徴を把握するために、該当する5事例について、①地形による囲まれ具合、②周辺の地形勾配、③国庁からの眺望、④特定の山に対する眺めに注目して分析をおこなった。

(2) 平地タイプの地形の特徴

a) 地形による囲まれ具合

地形による囲まれ具合として山に注目してみると、出雲国府(図-2)や因幡国府(図-5)では山に囲まれた盆地に立地しているが、下野国府(図-6)や肥前国府ではむしろ周辺が開けた場所に立地しており、地形による囲みが志向されるとはいえない結果となった。

ただ出雲国府と因幡国府では、山に囲まれる大きさが似ていることから、地形勾配が急激に変化する山裾を線で結ぶことで得られる面積を正方形面積に換算したところ、両者ともに2km四方程度の大きさであった(表-5)。

b) 地形面の傾き

平地のなかでもどのような地形に位置しているのかを

把握するために、国府の立地する地形面の傾きについて、方向と勾配を把握した(表-5)。その結果、山による囲みが存在しない美濃国府、下野国府、肥前国府ではいずれも、地形面が北に向かって上り勾配の傾きになっている特徴がみられた。とくに美濃国府と肥前国府では、その勾配が1.5~2%であり、短い距離では体感するのが難しい勾配であるが、地形面の傾きとしては十分に体感可能だと考えられる。

表-5 平地タイプの大きさと地形面の傾き

国府名	地形による囲み		地形面の傾き		備考
	有・無	大きさ	方向	勾配	
出雲国府	有	2300m × 2300m	東から西に上る	1%	神名樋野 茶臼山
因幡国府	有	2200m × 2200m	西から東に上る	1.1%	因幡三山
美濃国府	無	—	南から北に上る	1.8%	不破関
下野国府	無	—	南から北に上る	0.6%	一宮 男体山
肥前国府	無	—	南から北に上る	1.6%	一宮 巨石

c) 国庁からの眺望

平地タイプのうち周辺が開けた場所に立地する国府では当然であるが、図-6のように山に囲まれている国府でも比較の見通しが良い場所に国庁が立地する傾向がみられる。なかでも台地タイプと同じように駅路が重要視されているように感じられた。まだ定量的な分析には至っ

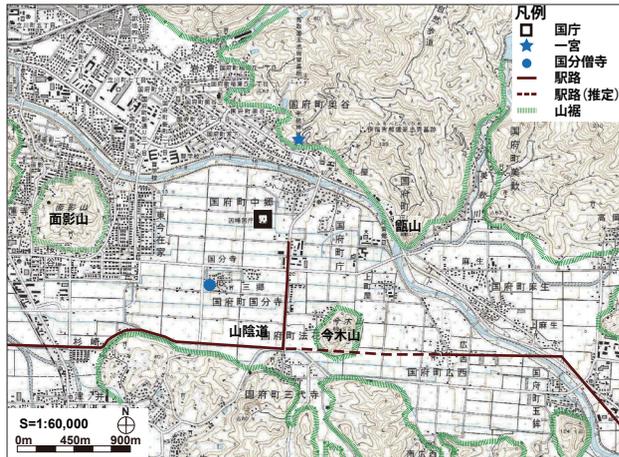


図-5 盆地 因幡国府
(1/25000 地形図(国土地理院)に筆者加筆)

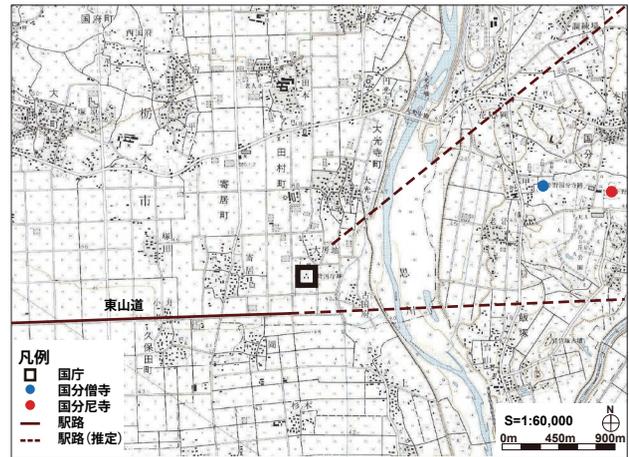


図-6 平野 下野国府
(1/25000 地形図(国土地理院)に筆者加筆)

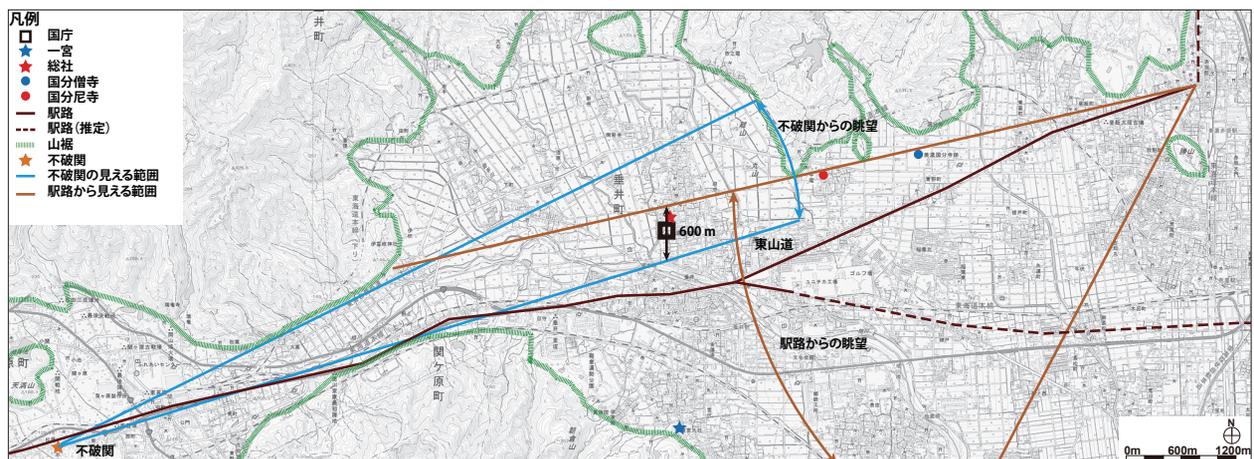


図-7 美濃国府と不破関と駅路との眺望の関係

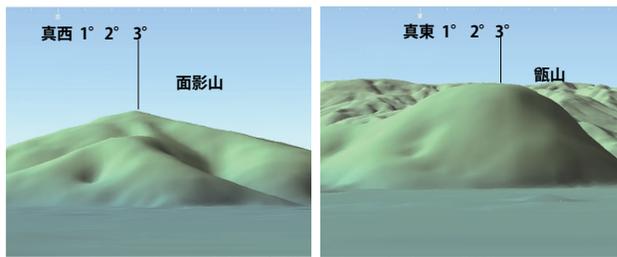


図-8 因幡国庁門の東西方向の眺望

ていないが、ひとつの例として美濃国府を報告する。

美濃国府が当時の三関のひとつである不破関を管轄する国府であることに注目し、西側に位置する不破関と、東山道が東側で北に大きく折れ曲がる場所から、美濃国府周辺における可視範囲を算出した(図-7)。その結果、両者とともに視認できる範囲は、国庁の南北軸でみれば600m程度の幅に限られることがわかった。重要な場所への見通しが立地選定に関わっている可能性があることから、今後、他の事例についても分析をおこなう。

d) 特定の山の眺め

2章で国府に関係が深い山についても整理したが、ここではそのうちの因幡国府と下野国府における特定の山への眺めを報告する。まず因幡国府は、発掘調査報告書により国庁と南門ともに傾きがあり、南門ではN³ Eだとされている。そこで、南門を視点にとり、カシミール3Dにより地形CGを作成した(図-8)。これを見ると南門の東西方向に面影山、甌山を眺めることができるだけでなく、面影山の山頂が南門の傾き方向と一致し、甌山は明確な山頂を持たないものの最も高く見えるあたりがやはり南門の傾きと一致している。なお、この二つの山と今木山は因幡三山と呼ばれており、その起源は諸説あるものの奈良時代に大和三山になぞらえたものだとも言われている。

こうした山の眺めに関しては、その眺めの意味も含めて精査が必要であるが、平地タイプの特徴を探るために継続して分析したい。

(3) まとめ

以上の結果をまとめると、平地に国庁を設けるにあたっては、①山に囲まれたそれほど大きくない広さの盆地、あるいは②北に向かって高くなる地形勾配をもつ開けた場所のいずれかで、かつ③駅路を中心とする周辺への見通しに優れた場所を選んでいたのでないかと考えられる。

平地タイプでは台地タイプほど明確な特徴が得られなかったが、適度な大きさで山に囲まれつつも見通しを確保していることや、国庁正面に向かって上り勾配の地形を選ぶ傾向にあることから、台地タイプと同様に、防御や緊急時への警戒、視線による支配という意図があった

のではないかと考えられる。

5. 結論

本研究の成果は以下のとおりである。

- 対象とした12の国府に関わる基礎データとして、国庁の大きさと向きを把握することともに、関連施設である一宮や総社、国分寺、また駅路と河川と、国庁との距離を把握し、それぞれの位置関係の特徴を指摘した。
- 対象国府を大きく台地タイプと平地タイプのふたつに分類し、それぞれの地形タイプごとに地形の特徴を把握した。その結果、台地タイプでは、①平地部から視認できかつ昇り降りに大きな支障のない高さ、②国庁正面側に高低差を有すること、③周囲の地形により450～500m程度の領域を設定できること、④駅路を中心とする周辺への見通しに優れることの4つの特徴がみられることを指摘した。また平地タイプでは、①山に囲まれたそれほど大きくない広さの盆地、あるいは②国庁正面に向かって高くなる地形勾配をもつ開けた場所のいずれかで、③駅路を中心とする周辺への見通しに優れることという特徴がみられることを指摘した。なお、いずれのタイプでも駅路を中心とする周辺への見通しに優れた場所が選ばれていることを指摘した。
- 上記の結果を踏まえ、国府の立地選定における地形の意味として、防御・警戒・視線による支配が重要な観点であることを示唆した。

なお、今回の研究では、国府立地にあたり台地と平地の選定理由まではわからなかった。ここには当時の国司と郡司の関係や、国府と郡家の距離関係が関係していると考えられ、今後の課題としたい。

参考文献

- 藤岡謙二郎：国府，吉岡弘文館，1995。
- 佐藤浩祥，十代田朗：国府の立地特性とその変遷に関する研究，土木史研究・講演集，Vol.23，pp.351-354，2003。
- 中世諸国一宮制研究会：中世諸国一宮制の基礎的研究，岩田書院，2000。
- 山中敏史，佐藤興治：古代の役所，岩波書店，1985。
- 安津素彦，梅田義彦：神道辞典，神社新報社，1990。
- 近江俊秀：古代国家と道路，青木書店，2006。
- 島方洗一：地図でみる東日本の古代 律令制下の陸海交通・条里・史跡，平凡社，2012。
- 島方洗一：地図でみる西日本の古代 律令制下の陸海交通・条里・史跡，平凡社，2009。
- カシミール3Dは、杉本智彦氏が作成し無償頒布しているもので、数値標高データを立体地形モデルに変換し、任意の視点からの地形透視図を作成できるソフトウェア。